特集

ともにいきる
ー震災から再生・創造へ

2011年３月11日。M9.0の巨大地震と大津波により多くの犠牲者が出され、同時に福島第一原子力発電所事故により、取り返しのつかない深刻な事態が生じた。それから一年余が経過し、被災地の“復興”をめざして、政府主導で津波被害を受けた地域の瓦礫撤去や道路補修など、ハード面での社会的インフラの再建を中心に復旧が進められている。一方で協同組合やNPOなど市民団体や個人のボランティアによる市民活動も精力的になされ、震災直後の救援や復旧期に大きな役割を果たしてきた。この災禍を機に日本社会が大きく共生型社会へと舵をきるであろうと期待した人も多かったはずである。しかし一年を経ていま、この国全体でみると、震災以前と以降でなんら変わった様子などないのではないかとすら思われるのである。

現在、被災地ではようやく、生活復旧から復興への道をそれぞれが思い描き、取り組み始めている。しかし震災前のまちを取り戻すことは不可能と言わざるを得ない。震災により多くの方が亡くなり、またそれを機に仕事や生活基盤を求めて若年層を中心に人口が流出し、被災地各地で過疎高齢化が一気に加速した状況である。今後は、震災前のまちの姿を取り戻すのではなく、現状を前提に高齢者や弱い立場の人びとが安心して暮らしていけるまちづくりや、若い人たちが戻れるよう雇用の施策が重要となる。また、そこから以前のコミュニティやつながりを基盤とした共同体を、たわいもない話題や冗談に仲間たちと共に笑いあい、生きる喜びを実感していた暮らしを取り戻すことが、被災者にとっての大切な復興の一つではないだろうか。

被災地の課題は時を追うごとに変化しており、それは複雑化している。今年３月、一年のセレモニーを迎え、被災された多くの方々が異口同音に口にされたのが「いまがいちばんつらい」という心の本音だ。がむしゃらにがんばってきたしんどさだけでなく、目に見えて進む復旧作業や巨額の復興資金に集中する産業や企業をしり目に、そうした変化から取り残される焦燥感と孤独感に苛まれ、見通しの立たない未来への不安と絶望感に押しつぶされぬよう過ごすことで精一杯だからなのかもしれない。

地域や個人個人の復興に向けて、被災地域や被災者自身が主体的に取り組むだけでは限界がある。私たち被災地以外の人間がかれらとつながり、まちづくりや産業づくりへ向けた恒久的な復興支援と長期的に支援に関わっていくことを決意しなければ、復興はかなわないのではないだろうか。

加速して変化する被災地の困難を私たちは理解し、共に向き合っているだろうか？ 本誌では震災当日に何が起こり、その直後からの避難生活や生活再建のための時期をいかに過ごし、一年を経ていまどのような新たな課題に直面しているのか。しかしこうしたなかでも、復興へ向けて必死に取り組み、そこから見えてきた希望の光について、被災各地の協同体組織やワーカーズコープ、地域労協の方々に記してもらった。

我われは被災地に寄り添い、どう歩んでいけるのか。もう一度ここから皆で考え、たしかなつながりを築く一歩にしていきたい。また、今号は東日本大震災と福島第1原発事故による被災者の記録でもある。（編集部）